

短歌集『あゆちのことは』を用いたくずし字学習システムの開発と評価

饒波 美香

近年、国立国会図書館デジタルコレクションなどを筆頭に古典籍の電子化が進み、インターネットを通じてデジタルアーカイブやデータベースなどから古典籍を閲覧することが容易になってきており、古典籍を現代に活用する研究が時流に乗っている。そうした中で、古典籍の研究においてくずし字の読解能力は重要である。くずし字読解能力の習得を支援するアプリケーションとして「KuLA」というアプリがあり、くずし字学習の入門者の中では人気を集めている。しかし、「KuLA」はくずし字を単字でとらえており、一つの文脈の中でくずし字をとらえる学習や古典籍そのものへの興味の向上が難しいのではないかと懸念されている。

そこで本研究では、くずし字学習入門者を対象に短歌でくずし字を学習するシステムを開発する。このシステムの題材として明治 20 年に出版された短歌集『あゆちのことは』を用いた。この短歌集は、ひらがなを主としたくずし字で書かれており、くずし字学習の入門として適している。システムには「あそぶ」機能と「ずかん」機能がある。「あそぶ」機能では、くずし字で書かれた短歌を句ごとに区切り、その現代かなにされた文をヒントにパズルのように組み合わせてくずし字を学習することができる。「ずかん」機能では、短歌集の歌人、歌題、はしがきが一覧でき、歌題の短歌の現代解釈と歌題の関連資料や解説をつけており、より深く短歌に対する理解を深められるようにする。そして、このシステムの効果をくずし字読解能力や古典籍への興味関心の向上という点から評価する。

システムの有用性を調査する評価実験として、大学生 3 名にシステムに関するアンケートへの回答と短歌の翻刻を行ってもらった。評価実験は事前アンケート、システムに関するアンケート、事後アンケートへの回答という構成からなる。事前、事後アンケートはシステムを使用する前後に行い、回答者の古典籍に関する興味関心についての問いや短歌の翻刻に挑戦してもらおうという問いが含まれる。翻刻をしてもらう短歌は『あゆちのことは』から無作為に選んだものである。システムに関するアンケートでは、その機能や使いやすさについて質問する。

評価実験の結果、まず事前、事後アンケートで行う翻刻によって、くずし字読解能力の向上は見られなかった。一方、事前と事後アンケートで古典籍の興味関心について同じ質問をしたところ、その回答に興味関心の程度が向上するという変化が見られた。システムに関するアンケートでは、全体に対する五段階評価として全回答者が最高評価または次点に良い評価をつけた。システムの改善案として、画面遷移がわかりにくいところの変更や、「ずかん」機能の検索性の向上などが挙げられた。

今後の課題としては、くずし字学習システムをさらに使いやすくし、解説を充実させることや、くずし字読解能力の向上につながる学習機能の強化が挙げられる。

(指導教員 綿抜豊昭)